
とある科学の磁気単極《モノポール》

ぬぬぬぬぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の磁気単極 モノポール

【Nコード】

N0692BA

【作者名】

ぬぬぬぬぬ

【あらすじ】

罪悪感を抱えながら、善と悪の間で揺れている高校生、黒瀬和真。彼は周りの仲間たちとどのようにに魔術と科学が入り乱れた世界を生きていくのか。いちおうちよいちよい変えながらかなり原作沿いで行きます。禁書の。多分二巻の部分以外はやりません。

第一話 逃走

「あーもうちくしょー不幸すぎますーっ！」

「一番不幸なのは巻き添えくらつてるオレだ！っっていうかお前とこの地球上の七十億分の一の確率で出会ってしまったこと自体が不幸だ！」

「何だその現実的でありながらもロマンチックな不幸は！？っていうかそれ友達にかけ言葉か？」

黒瀬和真は深夜の裏路地を走っていた。今日は七月十九日。夏休みに入ろうという、かなりテンションの上がる日のはずなのだが――

「いつオレがお前を友達と認めた？そんな覚えは無いんだが」

「何だと！？ならこつちもお前なんて友達とは認めねえ！ただの他人――」

「じゃあ僕関係ないんでこれで」

「待って下さい！私上条当麻が間違っておりまして！だから戦前離脱はやめてください！」

この通りさつき偶然会ってしまった友人と大規模な鬼ごっこをしている状況である。

叫び合って体力を消耗しながら、二人は熱気の漂う路地を走り続けた。程よく温まった体を汗腺から分泌される体液がじつとりと濡らし、目の周りを拭いながらも和真は走る。そして鉄橋のうえにさしかかった時――

「……………？」

ふと和真は何かに気づき、不信な顔をして後ろを振り返った。明らか

かに追つ手の足音が聞こえない。当麻もそれに気がついたようで、

「おい和真、不良どもを撒いたんじゃないか？」

「ああ、確かに気配が消えたのは感じたが………ばてるにしてもタイミングが揃いすぎじゃないか？これは………？」

上条に次ぐ不幸体質の彼は、彼ならではの危機察知能力を働かせる。そして彼の予感はい外と鋭い。

「何やってんのよアンタたち。不良を助けて善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

逃げ場の無い鉄橋の上で、和真はうんざりとした表情を作る。そこには事の発端となった少女が腕を組んで立ち、アスファルトにへたりこんだ当麻と和真を見下ろしていた。恐らく不良たちは彼女に始末されたことだろう。

「いや………もしオレが熱血教師だったら不良たちよりお前を更正させたい」

「和真に同意だ」

不良十数人を何事もないような顔で撃退する少女には、少し教育的指導が必要だと和真は思う。

「当麻、こいつだろ？最近お前にケンカ売ってくるっていうビリビリ中学生は」

「ん？ああ、まあそうなんだけど………」

「おい嬢ちゃん、クソガキ自分の能力に自信があるのかは知らないが、こんな時間に外出歩いてんじゃないやねえぞ？そんなことをするから——」

「ハア？あんた誰に向かって言ってるのよ。私は不良の一人や二人

――
「お前の心配なんてしてねえよクソガキが。また同じパターンで当麻が巻き込まれに行くのを心配してんだ」

お前は普通にどうでもいい、と言い捨てる和真。しかし和真は少女の禁句ワードをルビつきで言ったことには気づいていない。

「だあれがガキだっ！」

少女の叫びと共に撃ち出される槍状の電撃。それに和真は臆することなく反応し、唇をガリツ、と噛みながら防御の姿勢をとった。そう、完璧な防御を。

「上条バリアーっ！」

「え！？俺？」

和真の目の前に配置された当麻にズドン！と電撃が命中する。少女も手加減はしているだろうが、当たったら痛いとかそういうので済むレベルではないだろう。煙の中から出てくるのは当麻の気絶体か死体か……。

「……………それ結局俺に当たった上に無事で済んでない状況だろーが」

「……………で、やっぱりアンタは無傷なのね……………」

素晴らしいしかな上条バリアー。当麻は運良く電撃を右手でガードできたらしく、立っている顔は余裕そうに見える。実際の心境はどうかはわからないが。

「……………つたく、盾にすんなら先に言えよな……………まあそんなヒマなかったけど」

「悪い当麻。なんか反射的に——」

「お前は反射的に俺を身代わりにするんですか!？」

「いやぁ悪い悪い、悪気は無いんだと頭を掻く和真と、悪気の無い方が怖いと顔を引きつらせる当麻。

「それで？アンタはどんな能力なわけ？」

「何が？電撃を消したのはオレじゃないんだが」

訝しげに聞く少女に、和真はニコリとしながら聞き返す。

「何が？じゃないわよ。アンタ今、手も使わずに上条を自分の方に引き寄せたじゃない。念動能力系の能力者？」

「はいはい、お前みたいなのクソが七回ぐらいつくガキにまで教える程たいした能力じゃないからな」

教えてくれない上に（クソクソクソクソクソクソクソ）ガキ扱いをする和真の態度を見て、少女の血圧が再上昇を始める。そして頭の周りにはバチバチと電撃が走り、

「そう……………話す気がないなら無理矢理吐かせればいいってわけね？いいわよやってやるわよ!」

ポケットから、ゲームセンターのコインを取り出す少女。それを見た和真は何かを思い出したようで、初めて彼女に意識を向ける。

「もしかして……………学園都市3位の超電磁砲か？常盤台の？」

「どうした和真、そいつって有名な奴なのか？」

「お前知らないのか？超電磁砲と言えば学園都市に七人しかいない超能力者だぞ？それに第3位ときたら、確かコインを使って——」
「コインって言うと、今アイツが構えてるやつか？」

マジで？と顔を強張らせながら和真はゆっくりと振り向く。ニコッと笑う少女。また唇を噛む和真。

次の瞬間、オレンジ色の電撃が和真に襲いかかり、当麻はビームのように直進する電撃を見て息を飲んだ。和真は自分に向かってくる電撃を見、また面倒そうに顔をしかめそこから一步も動こうとしない。当麻はすぐさま駆け出そうとするがどう見ても間に合わない。直撃する、と当麻は思った。

しかし

「——あれ？え？」

電撃は和真の少し手前で失速すると、そのまま消失してしまった。和真は面倒そうに飛んできたコインを掴む。空気摩擦で少々熱されたコインだ。もはや弾であるコインは手で掴める程減速していた。安心した表情を見せる当麻と、ふーっ、と息を吐く和真。そして――

「……………何で？超電磁砲は50メートルくらいは飛ぶはずなのに……」
……………」

目の前の光景に目を見張る少女。

レールガンの欠点の元になる、すぐに熔ける弾も和真の右手に収まっている。なぜコインが熔けきったわけじゃないのにレールガンは消えてしまったのか？

納得のいかない少女に、和真は首の骨をゴキゴキと鳴らしながら説

明を始める。

「うーん、と。お前のそのレールガンってのは平たく言えば電磁誘導、つまりローレンツ力を利用して打ち出されるモノだ。だからその磁力を止めてやればレールガンは撃てない、と思っただが……」

和真は手に持ったコインを見つめる。

「完全には磁力は抑えられなかったらしいな。まあ急に撃つもんだから、ちよつと反応が遅れたらしい」

「………磁力を抑えるってどうやって——ってまさか？」

「まあお前は磁力線とかが見えるんだろ？ならオレがさつき当麻を磁力で引き寄せたのも見えたはずだ。これで納得か？」

しかし少女はまだ納得していないようで和真を睨み付け、当の本人はまだ手のひらに載っているコイン凝視している。よく見ると、空気摩擦によって熱せられたコインは少し煙を発していた。

「………仮にアンタが磁力を操れる能力を持っても、上条もアンタも鉄や磁石じゃないのよ？どうやってそんなこと………」
「ああ違う違う。確かにオレは磁力を操れるけど——」

いい加減熱っ！と和真はコインを投げ捨てる。

「磁力を持たないモノに磁場を与えることもできるんだな、コレが」

呆然とする少女に、氷持っていない？と涙目で尋ねる和真。少女の好敵手が一人増えた瞬間だった。

第一話 逃走（後書き）

さて、主人公の能力。

あまり詳しくはありませんが、磁力を作るということは電荷の動きを作ること？だから一種の発電能力？

とも思いましたが、彼は美琴のようなビリビリは出せません。美琴の磁力特化版みたいな感じです。

第二話 遭遇

「はあゝ……………暑い……………」

和真は部屋の中で悶えていた。暑い、というのは昨日の火傷ではない。部屋が、である。

「もしかして昨日の雷で家電逝っちまったか？」

呼びかけに反応を示さない冷蔵庫や電子レンジなど、そこらじゅうの家電に目を向ける和真。あのビリビリ中学生会ったらぶっ殺すとは思っている、ふと自分の下の部屋の住人のことを思い出した。昨日、共に逃避行を繰り広げた友人だ。

「オレはレベル4だし金はあるけど……………当麻は大丈夫かあ？」

ちょっと後で見に行ってみよう、と和真は同じ不幸仲間の当麻を心配する。

「とりあえず暑いから窓開けるか」

窓を開けてベランダに出る和真。目の前には東京都の西半分の広さを有する学園都市の街並みが広がり、ところどころに風車が並んでいる。

「（今日もいい天気だな……………」

目の前に広がる八階からの景色に和真は寝起きの目を細め、何となく壁に手をかけた。次の瞬間。

いきなり壁が崩壊した。勿論壁に手をかけていた和真は落下するしかない。八階のベランダから。

「ちょ、ちょい待てって！これは不幸ってレベルじゃない！っていうかまだこの小説始まったばかりなのにつ！？」

八階なんて高さから人が落ちたら、まず死は免れない。この状況で和真に残された手段はただ一つ。

「（当麻の部屋ななかのベランダに乗り移るしかねえっ！）」

勇気を出して一、二、三！と実際は一秒も無い中和真は何とか七階ベランダの外壁に手をかける。軽く走馬灯を見た和真の目は涙目だ。この経験は誰かに自慢できそう、と思いながらも胸に手をあて生を実感する。

「……………悪いな当麻。朝から騒がしくて——っ！？」

七階ベランダに乗り込んだ和真が見たのは、不幸そうな顔をした当麻だった。

そして隣には全裸の銀髪少女。

「……………当麻が遂にやったか……………」

「だー待て待て、俺は少女誘拐犯じゃない！てか『遂に』って何！やる要素はあると思ってたんですか！」

必死の弁明を始める当麻。その横で涙目になっていた銀髪少女は、

一気に当麻の頭に噛みついた。

「当麻、オレは信じてるぞ……？お前が心を入れ替えて出所してくるのを……」

「刑務所入りは決定事項！？……ってもう、不幸だぁーっ！」

そこから和真を引き留めようとする当麻と、逃げる和真の十分にわたる鬼ごっこが始まった。

「んで？話をまとめると……」

この声は結局捕まって話を聞かされた和真。話によると当麻が朝起きた時、ベランダに一人の少女が干してあったらしい。純白の修道服に身を包んだシスターだ。因みにその少女はまだ当麻の頭に食いついている。

「そして事情を聞いたところ……」

彼女は十万三千冊の魔道書を持っていて、それを狙う魔術結社から逃げていた際背中を撃たれ、当麻のベランダに引っ掛かっていたという。かなりぶっ飛んだ話だ。

「そして魔術があるかないかの論争をするうちに……………」

当麻の右手が彼女の修道服を破壊し、

「そのタイミングでオレが落ちてきた、と」

むう、と考え込む和真。三人の間に沈黙が流れる。そして和真はグツと拳を握りしめると――

「死ね当麻あつ！」

「何ゆえっ！？」

当麻に殴りかかった。

「何でお前はそんなラブコメイメントがホイホイ発生すんだっ！殺す！今日という今日はこのフラグメーカー野郎をぶっ殺す！」

「怒るとこはそこかよっ！」

嫉妬に燃えた和真の拳が当麻に襲いかかる。もともと身体能力が同じくらいなので、そこから二分にわたる決闘に決着はつかなかった。

そして――

「――ったく。お前は本当に不幸以外のモノも引き寄せるよな」

舌打ちをしながら、和真はインデックスと名乗る少女を見る。当麻のこういふところは昔からわかってるけどな…………と、和真は諦め

の姿勢だ。

「……………お前はコイツの言ってること信じてんのか？」

「むー、まだ信じない！魔術はあるんだって！」

当麻はインデックスのことが信じられないようで、和真に少し困惑した顔で聞く。確かにこの科学の発展した学園都市でいきなり魔術やら何やらを信じろという方が無理な話だろう。案の定和真も、

「そんな話信じられるわけがないだろう。だが、お前の右手がその……………なんだっけ」

「『歩く教会』だよ」

「そうそう、『歩く教会』を壊したんだろ？ならこの子が言ってる『魔術』って奴にも少しは信憑性が出てくるんじゃないか？」

「……………まあなあ」

んー、と頭を抱える当麻を見て、和真はニツと笑みを浮かべる。そして――

「じゃあオレは自分の部屋に帰るぞ。よく考えたらお前補習があるもんな。その子の面倒、ちゃんと見てやれよ？」

「え？……………っておい！さっきはあんなに怒ってたクセに、結局上条さんに一任ですか！？不幸は二人で分かち合おう！？」

「オレはそんなマイナスな関係は築きたくない」

当麻の制止を聞かずに、和真は走ってドアを開け逃げて行く。厄介事は当麻に任せた、といった格好である。

「へえー、君とあの人との関係はあんなにドライなんだね？何かか

「こいいかも」

「いや、いつもはもう少し協力的な奴なんだけど……何か用事であんのか？」

残された当麻は少し疑問な表情をしていた。

「さて、まず冷蔵庫がやられちまつてるから食い物買いにいかない
と……」

着替えをしながら和真は呟く。しかし頭の中に浮かんでいたのは、食べ物ではなくさっきの銀髪少女だった。何やら事情を抱えている顔……。あの笑顔の裏に何かありそうだなあ。と和真は思う。別に気にならないわけではない。だが……。あの子はなんだか自分には救えない気がした。

ただの言い訳かもしれない。厄介事から逃げただけなのかもしれない。でも気がつけば自分はこの部屋に戻ってきていた。

「……………当麻がいるし大丈夫だろ」

それでも当麻ならあの子を悪いようには絶対しない。そんな確信め

いたモノはあった。

知り合ってまだ数ヶ月だが、それが和真が当麻に抱いている信頼だった。

きつと助けてやれるだろう。和真は自分より当麻を信じていた。

「……………さて、行きますか——ってうわっ！」

考え事をしながら行動していたのが悪かったのか、ドアの前に落ちているバナナの皮に和真は気づくことができなかった。次に起きた出来事は言つまでもない。

「バナナって……………いつの、ネタ……………だ」

後頭部を強打したようで意識が遠のく。そしてそれから五分間のびていたのは、正直言えばいつものことだった。

「何だ……………？何コレ……………」

和真は近くのコンビニに来ていた。眠気が抜けないからコーヒーでも飲もうかな——、なんて考えて飲み物売り場まで来てみたのだ——が。

「（何でいつも飲んでる種類のやつだけ売り切れなんだ？え、コレ店員の嫌がらせじゃないよな？この前雑誌読むだけ読んで何も買わないで帰ったこと怒ってんの？）」

出かけて早々にちよつとした不幸に遭遇する和真。朝から数えてもう三回目の不幸である。今回も和真は数時間前に来た少年が大人買いをしていったことなど知る由もない。仕方がないので他の種類で代用する。

そうして店を出て口に缶をくわえながら歩いていると、今度は顔見知りとの遭遇である。今日は四連続不幸か？と和真は早くもくじけそうになった。

「あつ！アンタは昨日の！」

「昨日のビリビリ中学生か。今日も元気ビリビリだな。ところでうちの家電どうしてくれんだ？」

「元気いっぱいみたいに言うんじゃないわよ！アタシは御坂美琴っていう立派な名前があるんだから！」

「悪いなビリー。ところでうちの家電どうしてくれんだ？」

「こん……のっ！」

どこか小馬鹿にするような和真の態度に美琴の血圧は上がりっぱなしだ。もう髪の毛の周りにパチパチと音を立てているのは言うまでもない。ちなみに和真もさんざんスルーされて額には青筋が見える。

「ちよつとお姉様？この私を差し置いて、どこの殿方と話していらつしゃるのですか？」

「ああ、黒子。こいつよ、さっき話したム力つく奴」

「へ？ああ、さっき話していた殿方ですか？お姉様のレールガンを

防ぎきつたという——」

「何だ？今日は連れがいるのか？」

和真は美琴の数メートル真後ろにいる少女を見ようと首を伸ばした。そして黒子と呼ばれた少女は和真の顔を見ようと体の位置を動かす。そして両者とも、相手の顔を見た途端動きがピタリと止まった。

「黒瀬……………和真……………」

「ああ、お前か。……………久し振りだな、黒子」

その顔は、ただの古馴染みに会った表情にしては哀しすぎた。

「（何？何よこの空気！ギスギスじゃない！）」

美琴はかなり居心地が悪かった。なぜなら——

「……………」

和真と黒子が、お互いの顔を合わせた途端、ぶすつと黙りこくってしまったからだ。いや、黙っただけなら良いが、和真はともかく黒子の顔にはありありと嫌悪がうかんでいるのである。重力が何倍にもなったような空気の重さ。美琴はもうギブアップを宣言したくな

るまで追い詰められていた。

「（何よ、知り合いなのかと思った瞬間にこれって………いったいどういう仲なわけ？）」「

黙っていても仕方がない、と美琴は何か喋ってみようとする。

「あの——」

「今まで………何をしていましたの？」
「ん？」

口を開いた途端、黒子のイライラとした声に遮られた。これはアタシが口を出す場面じゃないかな、と美琴は黙りこむことにする。

「今まで何をしていたのか、と聞いているんですの！」

「別に。普通に学校通って普通に生活して——普通に生きてきただけだ」

「なぜ連絡の一つも入れないんですの！私や初春がどれだけ心配したか………！」

初春さんも知り合いなんだ………と、美琴は以外に思う。初春さんはなんかこういう人とかと接点無さそうだけど、と。

「連絡無しは悪かった。でもオレはこの通り元気だ。お前も相変わらず元気そうだし。………初春も元気か？」

薄っぺらい微笑を浮かべて和真は答える。

「ええ、元気ですわよ？もったも、アナタが半年前にいなくなっ

からしばらくはふさぎこんでいましたけどね……………」

お前のせいだと言わんばかりに和真を睨み付ける黒子。

「そうか……………でも今は元気なんだろう？ ならいい。充分だ」

「あの……………いなくなった」ってどういうこと？」

美琴はドギマギしながらも、どうしても好奇心を押さえられずに聞いた。ここ最近ずっと一緒に過ごしてきた黒子も、この磁力使いについては一言も触れることはなかった。そんな人に好奇心が湧くのは、少々仕方の無いことかもしれない。

黒子は少し答えにくそうな顔をし、若干顔をしかめながら口を開いた。

「この方は……………黒瀬は、私たちと同じ風紀委員ジャッジメントでした。半年前にいきなり姿を消すまでは……………」

第三話 再戦

「風紀委員だった？こいつが？」
ジャッジメント

「ええ、つい半年前まで。そして所属は一七七支部……………」
「それって、アンタたちと同じ……………」

美琴は驚きを隠せなかった。ジャッジメントというものは、本来入るのにもかなり長い期間を要する。目の前のやる気の無い男が、そんな努力をしてまで他人を助けるような人間には見えなかったのだ。そして何より気になったのが、

「それで途中でやめちゃったって、どういう……………」

美琴は詳しくは知らなかったが、入るのに長い期間がいる風紀委員ジャッジメントから、そう簡単に抜けられるものとはあまり考えられなかったのだ。何か特別な理由があったんじゃない？そう勘ぐる美琴に、和真は無表情で言う。

「お前には関係の無い話だ。知る必要も無いし、知って欲しくもない」

勘ぐる必要はないぞ、と言い残し和真は回れ右をして帰ろうとする。しかしその動きを黒子は見逃さない。

「待ちなさい、初春に顔も出さずに帰るつもりですか？」

「……………ああ」

「それはなぜ？」

美琴は和真の変貌ぶりにも驚いていた。昨日交戦した彼は冷静では

あつたものの、もっと明るくひょうきんな人物に見えた。しかし今の彼は――

「今更どの面下げて会いに行けるんだ？お前が言った通りオレは半年間音信不通だった。もうお前らには会いたくなかった。資料が支部に残ってたから住所も変えたし、学校の帰りなんかでも必ずお前らには会わないように注意を払った。そんなことする奴がどんな顔して会いに行くんだ？」

今の彼の顔には自嘲的な笑みか悲しそうな微笑しか表れていない。自分の不幸を笑うような・・・いや、自分を幸せを消してしまおうとしているかのような顔だった。対する黒子は歯をギリギリと噛みしめ、今にも和真にとっつかみそうな顔をしている。

「それなら、無理矢理初春にも会ってもらうまでですの………！」

次の瞬間、黒子の姿は一瞬で消えていた。彼女の空間移動テレポーションを使ったのだろう。行き先は初春のいる風紀委員一七七支部。美琴に声もかけずに消えたあたり彼女も相当テンパっているに違いない。

「ビリー、オレは帰るぞ。黒子が初春連れて帰ってくるのも時間の問題だ。幸い一七七支部はこっから結構遠いけど――」

「何で逃げるのよ？会えばいいじゃない」

「残念ながらそういうわけにもいかない。オレもう決め………って、何の真似だ？」

美琴は和真の腕を掴んでいた。勿論和真を引き留める為である。正直美琴は自分が正しいことをしているのかわからなかったが、それ

でもさっきの黒子の表情をみて見過ごすことはできなかった。

「アンタは逃げてどうすんのよ？一生あの子たちを避け続けるつもり？そんなことを続けて——ってあれ？」

美琴の体は見えない力に押されるように、和真から引き離されていた。美琴が和真の顔を凝視すると、噛んだ口の端からまたも血が流れている。

「昨日と同じ……磁力ね」

「なんで黒子がオレを直接連れて行かなかったかわからないのか？レベルは5でも初戦はガキだな」

「く……昨日からちよいちよいバカにしてくれるわね。わかったわ。昨日の再戦も兼ねて勝負よ！私はアンタを引き留める！アンタは逃げるなり私を倒すなり好きにしなさい！」

言うなり美琴の頭から電撃が発せられる。対して和真は脱兎のごとく走り出し、逃走を開始した。

「待ちなさいっ！ちよこまか逃げんなっ！」

「いやいや、逃げないと死ぬからな？電撃が直撃しても動いてられるポテンシャルなんてないし」

自分より前方にある置物に電撃が直撃したのを見て和真はため息をつく。これは逃げ切れそうにないなあ、と呟いて近くの河原に駆け下りた。障害物の少ない広場に出る。それは逃げるのではなく戦うことを意味していた。

「何？戦う気になったワケ？」

「とつと倒してとつと帰る。そうすることに決めたんだよ」

「ふん。この私に向かつて大きい口きいてくれるじゃない。レベル5でもないアンタがね」

「レベル5が何だ？4と一つしか変わらんだろ」

美琴が放つ電撃を右へ左へかわしながら和真は余裕な顔で喋る。本来電撃とは見てから避けられる速さではないが、和真は美琴の目線や体の動きから予測して軽々とかわす。その余裕の態度が美琴を更に挑発していることに美琴は気づいていない。

「そんな直線的な攻撃、狙いがわかりやすくてありがたいな。……

…時に御坂^{ヒリィ}、磁気単極子^{モノポール}って知ってるか？」

「はあ？えつと（ドオン！）………確か（ドオン！）………」

「……………待つてる暇がないからオレから説明するか。簡単に言えば片方の極だけを持つ仮想上の粒子だ。まだ現実には見つかったはいないんだが……………それをもし作れたらどうする？」

「そんなの（ドオン！）……………知らないわよっ！（ドオン！）」

「そんなにドンドン電撃撃たなくてもよくないか？会話の途中で……………」

和真は後ろに下がろうとして橋の柱にぶつかる。もう逃げ場は無いわよ？と勝ち誇った顔の美琴。しかし和真はまだ余裕な顔である。

「じゃあ質問を変えよう。もしお前の体と周りにある全ての石を違う極にして、磁力を持たせればどうなると思う？」

「へ！？」

周りの小石がカタカタと動き始めた。これが何を意味しているのか美琴は直感的に理解する。冷や汗がツルリと頬を伝った。

「正解？もう言わなくてもわかるだろ」

周りの小石が一齐に美琴に襲いかかった。手加減でもしているのか石のスピードはあまり無いが、体中に石がくっついていては身動きはとれなくなるだろう。しかし美琴はまだ諦めていない。すぐに磁場を――

「ああ、言うておくがお前が磁力を変化させようとしても無駄だ。もともと磁力専門のオレと電撃専門のお前とじゃレベルを補って余りある差があるんだ。昨日とは逆だ。それに………」

和真は、足をとられて倒れ込んだ美琴を見下して言った。

「オレをただのレベル4だと思うなよ？」

第三話 再戦（後書き）

磁気単極子はもつと難しいもののなみたいですが、この作品ではあくまでも片方の極のを持った物体、ということにします。

主人公設定（前書き）

。今までに出ただいたいの設定です。でてない部分もありますが・・・

主人公設定

くろせかずま
黒瀬和真

身長165? 体重48? 性別 男

当麻と同じ学校に通う高校生。当麻との付き合いは高校入学時から。当麻の上の部屋に住んでおり、そこまでたいした友好関係ではないが一応は友達と呼べるレベル。当麻に対しては少々尊敬のような感情を抱いており、自分が行動する時の見本などになっている節がある。また、当麻にも劣らない不幸体質であり可哀想な生活を日々送っている。元風紀委員でもあり、黒子や初春とは結構古い仲の様子。しかし半年前にいきなり黒子たちの前から姿を消し、今もずっと接触を避け続けている。また、付き合いは長いものの黒子とは昔から馬が合わず基本的に仲は悪い。

能力

マグネティックカー
磁力操作

レベル4

磁力を支配する能力。もともと磁力を持つていないもの同士に磁力を発生させて引きつけ合わせたり、自分と相手に発生させ反発させたりと凡用性が高い。レベル5に近い強さの能力だが、自分自身に磁力を作れずレベル4と判定されている。本人自覚で、能力発動時に唇を噛む癖がある。

モノポール
磁気単極子

物体に片方の極だけの磁力を発生させる。使い方はいろいろあるが後は本編で。

主人公設定（後書き）

主人公は基本的に、

能力の強さは一方通行に及ばず。

ケンカのつよさ
身体能力は土御門に及ばず。

心の強さ（正義感）は当麻に及ばず。

負けん気は美琴に及ばず。

という何一つ突出してない微妙なお人です。

第四話 嫌いな奴は時間がたってても嫌い

美琴は信じられなかった。今の勝負はどう考えても自分の負けだ。
超電磁砲も昨日防がれたし、磁力を使っても力で押し伏せられた。
いくら相性が悪いとしても……ここまでの完敗は初めてだった。
最近勝負を挑んでいたツンツン頭の少年との戦いを含めてもだ。

解せない顔をしてるな、と和真は立ったまま、身動きのとれない美琴に言葉をかける。

「『なぜレベル5の自分がレベル4に負けたか？』だろ？お前の疑問は」

「……………」
「本来オレの能力つてのは、レベル5に認定されてもおかしくない数値なんだよな」

「……………へ？」

和真の言葉に美琴はキョトンとする。しかし美琴も思っていた。

確かに和真の能力はもうレベル4のそれを凌駕している。

磁気単極子など普通の磁力使いにはできると思わないし、現に美琴以上の力で和真は磁力を操っているのだ。レベル4にしては強すぎる。

「それじゃあ何でアンタはレベル5になってないのよ？能力判定の受けそこない？」

「いやー、自分の弱点を教えるみたいで気が進まないが……。オレはな、自分自身に磁場を作れないんだよ」

「自分自身？」

「ああ。どうもそれが能力判定の時の足枷になってるみたいでな。どれだけ頑張ってもレベルが上がらん。……まあレベル5になつたところでどうする、とも思っけどな」

やや自嘲的にな笑顔で自分の能力について語る和真。美琴はその姿に何かを感じたが、何が引つ掛かったかはわからなかった。それより気になることがある。

「昨日のあれは何よ？あのバカを引き寄せたのは？」

ああアレね、と和真は美琴の疑問を理解する。自分の体に磁場をつくれないのに、なぜ当麻を自分の方へ引き寄せることができたのかだ。

「ありゃあ簡単だよ。例えば身につけている物、服とかアクセサリとか。そういうモンをしっかりと固定して磁場を作れば、体につけたのと同じことだろ？」

「じゃあ何で自分の体には作れないわけ？いかにも最初にやりそうなことじゃない。能力を手に入れた時とか」

「いやいや、昔はできてたんだがな。今はもうサッパリだ」

何で？と問いかける美琴に和真は歩き出しながら言う。もう黒子が帰ってくる時間だと見当をつけたらしい。

「んー………トラウマ精神的外傷かな？」

磁力は五分くらいしたら消してやる、と言い残して和真はその場を去った。

「ちょっと！白井さん、いきなりどうしたんですか？」

「ここらへんに……黒瀬………が………っ！」

和真が去ってちょうど五分後、初春を伴った黒子が先ほどの場所に戻ってきた。息は切れ、もう既に肩で息をしている体で周りを見渡す。しかし辺りには、和真の姿どころか美琴の姿すら見つからない。

「お姉様まで………これは………一体？」

「あ、白井さん。あれ………」

初春が指を指したその先には、地面がえぐられたような戦いの後。間違いない、と黒子は思った。ここでお姉様が電撃を放った。そう思った時、その背後から、

「ごめん黒子……。あいつ逃がしちゃった」

美琴がよれよれの体で立ち、黒子たちの方へ歩いてきた。

「お姉様！……もしかしてあの男と戦闘を？」

「うん。これ以上ない完敗。しまいには手加減までされる始末よ？
情けないわね……」

「そうですの……お怪我はありませんの？」

うん、ともう一度答える美琴に、黒子はホッと安堵する。安堵すると共に、美琴の敗北にあまり驚いていない自分に気がついた。あの腹の立つ男は昔から得体の知れない強さを持っている……。黒子は和真とは馬が合わず、嫌いな人間の一人であつたが彼の強さは認めていた。

「み、御坂さんが負けたってどういうことですか！？それに白井さん、さつきから何をそう焦ってるんです？」

いまいち状況が飲み込めない初春が、黒子に説明をしてくださいと詰め寄る。黒子は苦い表情をした。

「初春……ここに黒瀬が……黒瀬和真が……」

「えっ……」

全ての感情が吹き飛んだ初春の頭には、笑ってこっちを見る少年の姿が鮮明に写し出されていた。

「なんでこんな夏休み初日なんて日に会っちゃまうんだか……」

和真は公園のベンチで一人項垂れていた。

正直心臓が飛び出そうになった、と言うより他にない。黒子と会った時だ。思えば御坂との会話はちよつと現実逃避だったんだな、と和真は自分の心理状態を冷静に分析する。

予想通りと言つては何だが、黒子や初春は心配してくれていたようだった。それでも黒子の顔を見た途端には、すまなく思うとともに急に風紀委員ジャッジメントだった頃の記憶が甦った。

簡単な仕事ばかりに辟易していた時。

初めて事件を解決して狂喜した時。

黒子と口論をしている間に犯人に逃げられた時。

その後の初春の毒舌に少し涙した時。

思えば全てが昔のことで、全てが素晴らしかった。

本当は戻りたい。ジャッジメント 風紀委員にはもうなれなくても、せめてあの二人のいる所へ帰りたい。

でも――

「無理な話か」

戻るわけにはいかない。自分は今もうそういった幸せ……そう、
『幸せ』は諦めたのだから。それに――

「あいつらを巻き込むなんて絶対にお断りだ」

そう決めた。

半年前に。

第五話 勝ったから格好がつくわけではない（前書き）

今回は少し短め

第五話 勝ったから格好がつくわけではない

「（はあー、ベンチに座ってちょっとブルーになってたら、結構時間食っちゃったな……………」」

陽も傾いてきた頃、和真は五日分ほどの食料を持ちながらマンションに向かっていた。あれから結局黒子たちに会うことはなかったが、心を整理するのに時間を使ってしまったのだ。

「やっぱりまだ戻りたいと思ってんのか……………」

夏休み初日のせいか、この学園都市の生徒たちの姿は見つからない。人気の無い道を歩きながら、何気なく住人のものと思われる自転車を虚しい気持ちで見ていた。

次の瞬間。

ちょうど自転車と自転車の間に着々するように当麻が落ちてきた。

「当麻、何してんだ？」

「か、和真か！？ 大変だ！ ま、魔術師が……………」

「魔術師い？」

暑さで頭がやられたか、と推測する和真。しかし必死に何かを差す当麻の指の方を見ると、そこには信じられない光景があった。

人形の炎が暴れている。

「な、なななな何だありゃ？」

「だから魔術だつて言つてんだろ！インデックスを狙つて来たんだ！」

「——ッ！」

必死に頭の中を整理する。和真は思う。こういう時はいちいち無駄な事を考えても無駄だ。簡単に、わかりやすく捉えよう。簡単に簡単に簡単に！

「要するになんだ、魔術師を倒せばいいってこと？」

「飲み込み早……………」

「ルーン？」

「ああ、アレはルーン文字を周りに刻むことで発動する魔術らしい。その証拠に、マンションからあの化け物は出てこれてないだろ？」

うーん、と和真が唸る。なぜ当麻がそんなことを知っているかなんて尋ねない。気にしない方が行動をしやすいからだ。当麻は相当気が立っているのか、こうして話している間にも飛び出して行きそうな勢いだ。

「そのルーンの場合はわかるか？」

「ああ、っていうか建物全体に何万枚と貼られてる。サボってるのかわかんねえけど全部紙だ」

「ん、そうか。ところで、お前の右手はアレには効くのか？」

「ああ、消すまでとはいかないけど防ぐことくらいはできる」

目を瞑って再考する和真。二秒後、唇を噛む。準備完了。

「オレは紙を全部剥がすから、お前はその魔術師のトコ行ってる。あつちは一人なんだろ？」

「……………和真、信じていいのか？」
「任せろ」

和真はそう言つと一目散にマンションに近づき、朝と同じ要領で二階へ上がる。当麻は少し心配そうに和真を見たが、ここは信用するしかないと一気に階段を駆け上る。

「建物全体と紙全てに同極の磁場を……………」

目を閉じて演算に集中する和真。炎の巨人の姿をちらりと確認するが、オートに設定されているのか当麻の方にかかりつきりだ。しかし当麻に危険がふりかかる分、早くしないと危ない状況に変わりはない。

「（くそ……………いかんせん数が多い……………もう少し！）」

非常用階段で何階かマンションを上に登りながら演算を続ける。見たところ当麻の言つとおり何万とあるが、紙を剥がすくらいの磁力だったら作るのに苦はない。一枚の紙に磁場を作る時間はほんの一瞬だ。そして和真が六階に達した時――

「よし！演算終了。行けっ！」

発動と同時に紙が全てマンションから同時に離れた。建物から離れたたくさんの紙は、風に吹かれてマンションから遠ざかっていく。

これで大丈夫なんだろうか……と和真は周りの様子を見回している。

『……………ノケン……………ス!』

この声は上の階か、と和真は察知して、すぐさま階段でもう一階上にかかる。

そこには――

大柄な魔術師（らしき）人物と上条当麻がいた。

「イノケンティウス！イノケンティウス！」

赤髪で身長2メートルはありそうな魔術師は必死で自分のしもべの名前を呼び続ける。しかしもうルーンの紙はほとんど剥がされてしまったのだ。剥がされた紙は風に煽られ閑散とした街の中を飛び回っている。

「お前の仕業か！いったい何をした！」

魔術師ことステイルは、当麻の後ろからスタスタと歩いて来る和真に目を剥いて言った。和真は手摺に手をかけながら答える。

「別にたいしたことはしてねえよ。あんなペラい紙切れなんて何万枚あるうが飛ばすのに造作はない。お前がどれだけがんばろうと――
――って熱っ！熱いこれ！」

「あー、悪い。そこでさっきちょっと戦ったんだった」

「何かまだ五話なのにまた同じパターンで火傷してない?! ちよつとぐらい格好つけさせるや! 主人公が格好良くないと人気でねえぞ!」

一部が溶けるほど熱せられた手摺を触つてしまい悶える和真。彼は当麻^{ヒコロ}ではないので、格好つけることは許されないのだ。というより今は少しシリアスな場面であるはずなのだが。

「くっそ……まあいい。この火傷の分もあわせてキツチリお返しさせてもらおうじゃないか魔術師?」

「それは完全な逆恨みだと上条さんは思っんですが……」

「く……そ………っ!」

ゆっくりと歩いてスタイルに近づく二人。その後、二つの打撲音がマンションに響いた。

しかし和真はまだ知らない。その魔術師の背後にある手負いの少女の存在を。

彼はまだ知らない。自身の精神的^{トラウマ}外傷に深く直結するものがそこにあることを。

第六話 人は見かけじゃ測れない

「おい、そいつ早く手当しないとやばいぞ！出血が多すぎる！」

和真と当麻は、血だらけのインデックスを連れて路地裏に来ていた。背中には魔術師によつて切られた深い傷がある。すぐにでも病院に連れて行きたいところだが、彼女はこの都市の住人ではないので部外者が病院にかかると情報が漏れやすい。情報が漏れれば、またさっきのような『魔術師』が襲いかかってくる危険もある。さっきの炎使いも十分に危険だが、それ以上に危険な敵がこの少女を狙っているかもしれないのだ。

「おいインデックス！お前の持つてる十万三千冊の魔道書に、この傷を治すような魔術はねえのかよ！」

残っている可能性に当麻が叫ぶ。もはやそれ以外にすぎる他はないのだ。

「……………ある、けど。君には多分無理……………。私が術式を教えたとしても、君の、能力が邪魔をする……………」

「そ、んな……………」

「当麻の右手が問題なら、オレがやるのはだめなのか？」

和真の問いかけに、インデックスはゆっくりと首を振る。

「この人の右手が邪魔をするわけじゃないの……………。魔術っていうのは、君達みたいに才能ある人たちが使う為にあるものじゃないから……………。君たちと違って才能のない……………超能力が使えない人じゃないと魔術を使うことはできないんだよ……………」

「なっ……………」

要するに、この学園都市で能力開発をうけた全ての生徒はもう能力者として認識され、魔術を使うことはできないらしい。たとえレベルが0であろうとも、能力開発を受けた時点で脳の回路が変わってしまう。つまりこの学園都市にこの子を救える生徒はいない……？そう考えた和真の頭に何かが引かかった。この街の生徒なら。つまり、

「……………あんまり迷惑はかけたくないが、行くしかないか」

「あの先生、もうこの時間で寝てるなんて言わねえよな……………」

あの人生活態度がオッサンだから大丈夫だよ、と和真は笑おうとしたが、インデックスの刀傷が目に入り吐き気をこらえるのに精一杯になった。

青髪ピアスから小萌先生の住所を聞き出し、少し別の疑惑を抱えながら古いアパートに向かった。和真もだいたいの道は（なぜか）わかっていたし、駐車場には先生特有の特注自動車がある。すこし錆びている階段を駆け上がって一番奥の部屋のチャイムを鳴らすも、

なかなか先生がでない。しかもそれにいらついで同時にドアを蹴った当麻と和真の足の親指から、なにやら不吉な音が聞こえてくる始末だ。さすがは不幸の二人組である。

「はいはいはい。対新聞屋さん用にドアだけは頑丈なんですー。今開けちゃいますよー？」

扉を開けて姿を現したのは見た目は子供で頭脳は大人。学園都市の都市伝説にまでされていて、和真と当麻の担任でもある子萌先生だ。ウサギ100%のパジャマがさらに子供っぽさを演出していることにこの人は気づいているんだろうか、と和真は思う。

「あれれ、上条ちゃんに黒瀬ちゃん。新聞屋のバイトでも始めたんですかー？」

「先生、見ての通り緊急事態だ。ちょっとおじやまします」

インデックスの背中を指に付けて見せると、小萌先生の顔からさつと血の気が引く。この人は新聞屋以外の人は自分の家に来ないとでも思ってたのか？と和真は疑問を持ちながらも、当麻の後に続いて部屋に入った。当麻の背中にいるインデックスを見ないように

「ちょ、ちょっと！先生困ります！いえそのつ、別に部屋がすごいことになってるとか、ビールの空き缶が部屋の中に散らばってるとか、灰皿の煙草が山盛りになってるとか、そういうことではなくてですね」

「先生、当麻はともかく、オレはもう先生のギャップありまくりの生活態度については知ってます」

「い、いや、それはわかってるんですけどっ」

「当麻に知られるのが問題ってことすか？」

「もっつ、黒瀬ちゃんは先生をからかわないでくださいっ」

この年でちゃんづけはちよつとくすぐったいよな……と和真は場にそぐわないことを思いながら、直後に悲鳴を上げた子萌先生に目を向ける。どうやらインデックスの傷が目に入っただけらしい。

和真も見たときは驚いた以上の過剰な反応を示したのだが。

「とりあえずオレはもう部屋から出ます。あんまり他人の出血ものは得意じゃないんで……。後の説明は当麻から——ッ！」

「ちよつと、黒瀬ちゃん!？」

部屋をすぐに出、ばたん、とドアを閉めて和真は座り込む。

和真は他人の傷や出血を見るのが嫌いだ。いや、嫌いというレベルではなく、もうそれは恐怖に近い意識だった。

おえっ、と和真は吐き気を催しながら、フラッシュバックする記憶を頭から消そうと試みる。

胸部を貫通している鉄柱。

無造作に投げ出された手足。

虚ろな目。

夥しい出血。

ふと落ちている小石に、視線をやった。能力を使って石を動かそうとするが、石はピクリともしない。唇から出た血だけがぼとり、と石に落ちた。

「……………畜生が……………」

翌朝。

和真は小萌先生の家に向かっていた。目的はもちろん少女の容態の確認である。どうやら傷は『魔術』とやらで塞がったようだが、昨日の出血量からして体調に変化は無いか、と和真は思ったのでこうして走っている。最初は電話で済ませようと思っていたのだが、当麻の携帯はなぜか繋がらなかった。

昨日と同じ部屋の前に立つと、中の会話が少し聞こえてくる。これはこの家の主か、と和真は一発で察知する。

『——執行猶予です。先生スーパー行ってご飯のお買い物してくるです。上条ちゃんはその間に何をどう話すべきか、きっちりかつちり整理しておくんですよ？それと、』

『それと？』

『先生お買い物に夢中になつてるとわすれるかもしれません。帰っ

てきたらズルしないで上条ちゃんから話してくれなくっちゃだめなんですからねー?」

それを聞いて和真は安堵の表情を見せる。もう巻き込まれてしまった当麻と、微妙な立場の和真と違って先生は関係のない『一般人』なのだ。できればこれ以上は首をつつこんで欲しくないと和真は思っていた

のだが、その心配は杞憂だったようだ。

ドアを開けて小萌先生が部屋から出てくる。和真の姿を見て驚いた先生だったが、すぐに表情を切り替えると先生モードの声で言った。

「もう、黒瀬ちゃんもあんまり危ない橋ばかり渡っていてはだめなんですよー? 先生心配しちゃうんですから」

「すいません先生。でもありがとうございます。これからは安全な橋も渡るようにしますよ」

「危ない橋を渡らないっていう選択指は無いんです?」

それは残念ながら無いです、と和真は笑った。すこし寂しげな、未練の残る笑이었다。

小萌先生は和真の顔を見、少し不満そうな顔をしてから135?の体を精一杯動かしてアパートの階段を下りていった。

「・・・いい先生に恵まれたな。オレも当麻も」

そう言ってドアに手をかけた和真だが、中で何か話している声が聞こえてノブを掴んだ手を止める。どうやらあのシスターは喋れるくらいには回復したようだ。そう思った和真だったが、次に聞こえた言葉を聞いて思考が止まった。

『私の抱えているもの、ホントに知りたい？』

ドアを開けようとしていた手も同時に止まる。ぼんやりと彼は、寝起きで上手く働かない頭で思った。

コレは聞いて大丈夫なのか？

これ以上聞いたら、もう後戻りはできない。少女を見捨てることに罪悪感を感じてしまうし、そんな自分を和真は嫌悪するだろう。もう彼女を救うしか道は残されていない。だが――

彼女の抱えているものが、本当に大変なものだったら？

とうてい自分には解決できそうにないものだったら？

それでも和真は思う。自分も当麻も彼女を見捨てることはしないだろう、と。しかしだからこそその先に待っているものが怖い。喜劇^{ハッピーエンド}的結末か、悲劇^{バッドエンド}的結末か。二つに一つだ。自分にそれを決められるだけの力があるのか？当麻にはあるのか？もしそれだけの力がなかったら？

様々な思考が頭の中を渦巻く和真の耳に、当麻の迷いの無い、どこまでも純粋な声が聞こえる。

『なんていうか、それじゃこっちが神父さんみたいだ』

その声を聞いた時点で和真は決めた。いや、決めざるをえなかった。

「あんのバカ……。もう選択指もないようなもんじゃねえか……

……迷ってるこっちがバカみたいだ」

笑いたいような、泣きたいような顔で和真はドア越しに二人の会話を聞き始めた。

第七話 死亡フラグは分かりやすい

和真は一人で夜の学園都市を歩いていた。別にたいした用があつて歩いているわけではない。少し気晴らしでもしようかと思つての気まぐれな外出である。頭の中では、三日前に聞いたとある少女の秘密が反芻していた。聞いた、というよりは盗み聞きに近いやり方で知つたのだが。

魔道書・・・必要悪の教会・・・魔神・・・。

ネセサリウス

どれもこれも自分の手に余るようなモノばかりだ。気晴らしをしようと思つたそもその理由も、こういつたことを考えて鬱になつたからである。それでも少女の闇を聞いてしまった以上、彼女を助けないのは自分自身が許さない。おそらく間接的にも自分はその二人を助けていくんだらう、と和真は思う。

「そういう変な助け方しか出来ないからなオレは……。正面きつて助けるのは当麻で十分だろ」

少しすっきりした顔で呟きながら、和真は何気なく横にあつたコンビニを見てあることに気づいた。

「何だ？コンビニに人が一人もいない……………」

潰れたのか、と考えそのまま前を向いて歩き出す。

そこではっきりと異変に気づいた。

「(どういう事だ？人が……いない……？)」

いくら夜だとは言っても、ここ学園都市にはもちろん車も走っているし帰らずにたまっている学生達だっている。それなのにここは……人一人どころか、物音一つ聞こえない。まるでここだけが世界から取り残されてしまったような――

「ステイルが人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」

「(な……に……？)」

怪しげな雰囲気警戒していた和真に、目の前の魔術師はまったく気配を感じられることなく話しかけてきていた。それだけで、たったその一動作で、和真はこの得体の知れない魔術師と自分の力量の差を理解した。抵抗してもムダだと、そう感じさせる何かが目の前の敵にはあった。

「力差を理解してすぐに敵意を引っ込めたあたりは賞賛に値すると思います。さっきの少年との違う点ですね」

「(さっきの少年……？)」

それが当麻だと気づくには少し情報が足りなかった。しかしこの魔術師が何をしようとしているかは推測できる。インデックスを狙ってきたのだ。

「黒瀬和真。学園都市レベル4の能力者ですね？」

「……わかってるからこうしてきてんだろーが。それであんたは誰だ？」

「神裂火織、と申します。……できればもう一つの名、魔法名は名乗りたくないのですが」

「魔法名？」

「ステイルから聞いていませんか？魔術師が魔術を使う時に名乗る名、つまり殺し名ですよ」

「……………」

ということは……………？と和真は頭の中を整理する。この魔術師はインデックス絡みで自分の所へ来た。しかし魔術を使いたくはないと言っている。つまり――

「私は話し合いをしに来たのです。話し合いと言うよりは、もっと一方的なのですが」

「……………内容は？」

単刀直入に言います、と神裂は前置きした。

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

「……………早速かよ」

和真は溜め息をついた。恐らくこの二人の魔術師は和真もインデックスとの関わりを持った人間だと判断したのだろう。その判断は正しい。和真は今日、もうあの少女と当麻を陰からでも表からでも助けていくと決めたのだから。

「断る、と言ったら？」

次の瞬間、和真を無数の斬撃が襲った。和真は何とか反応してかわそうとするが、恐怖であまり足が動かない。繰り出された斬撃は足を掠めながら、そのまま和真の後ろにある街路樹を両断した。

「私の七天七刀が繰り出す七閃の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間

に七度殺す速さです。いくら能力者とは言っても、かなうレベルではないと思いますが」

「（……………刀……………だよな？）」

「もう一度問います。魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

「……………断る！」

またもや斬撃が和真を襲った。今度は指を掠めたのか、少し血が出ている。和真は僅かな痛みに顔をしかめながらも、頭の中では疑問を浮かべていた。

「（……………なんでまた攻撃をくらったんだ？）」

和真は噛んで血が噴き出した唇を舐めながら眉をひそめる。刀が攻撃に使われているらしいから、刀と自分の身につけているものに同極の磁場を作ったのだが……。なぜ何の変化も起こらない？焦りと疑問から顔に汗を浮かべていた和真だったが、街灯に照らされてあるものが見えた。自分の血がついているからなおさら見えやすい。

七本の鋼系。ワイヤー

「それなら話は速い……」

「何をしているのですか？私達はあの子を速く保護したいのですが」「無理な話だつつつてんだろ」

さらに斬撃が和真を——襲わない。全ての鋼系ワイヤーが和真を避けるように飛んでいき、和真のいる場所の周りを七本の斬撃が切り裂いていた。既に七本の鋼系には和真の服と同極の磁力を帯びている。系にも磁力を作れる繊細な操作は、やはり和真がただのレベル4で

はないことを示していた。しかし神裂は状況がわからず首を傾げている。どうやら自分の詳しい能力についてはあまりわかっていないようだ、と和真は推測した。

「……………」

「タネがわかれば簡単な話だ。つまらないトリックなんて使いやがって」

「……………仕組みはわかりませんが、七閃を攻略しましたか。私も本気ではありませんが、貴方を力づくで従わせるのは骨が折れそうです。貴方にも話してあげましょう」

「何をだ？」

神裂は感情を感じさせない声で言った。

彼女の真の闇です、と。

「・・・・・・・・何だよ・・・・・・・・それ・・・・・・・・」

和真はただ驚いていた。

完全記憶能力。

それをもっていたばかりに魔神とまでよばれるような存在にされ、さらに一年ごとに記憶を消さなければ生存できない少女。友人でもあったにも関わらず完全に忘れ去られ、もう彼女の敵としてでしか彼女の前に立てない神裂と炎の魔術師。儚い努力。残酷な現実。そして少女の過酷な運命に。

「・・・・・・・・これでわかったでしょう？ 私達はある子を保護し、記憶を消し去らなければならない。だから大人しくあの子を引き渡して欲しいんです」

和真はショックに頭が回らない。混乱しすぎて、たった今の話に変な所があったのにも気づくことができなかった。とにかく会話をつなごうとする。

「・・・・・・・・その話、当麻にもしたのか？」

和真が思い付いたのはただそれだけだった。まだ答えを出したくなかった。助けていくと決めたのに、早速リタイアなんて冗談じゃないと和真は思った。

「ええ」

「何てアイツは返したよ？」

「・・・・・・・・怒っていましたよ。自分の臆病のツケをあの子に押し

付けるな、と」

神裂はどこか遠い目をして言った。当麻の言葉が少しは心に響いているのだろうか、と和真は思う。

「あんな体で最後まで私に挑んで来て……。まったく何が彼を動かしているんだか」

そうか、と和真は笑った。いかにも上条当麻らしい、と。ただ一人の少女のために自分を犠牲にしても、あんな喜劇的結末から果てしなく遠い話を聞かされても、それでも上条当麻は諦めない。なら

和真は唇を噛む。

「オレも諦めるわけにはいかないっ！」

和真は神裂に向かって走る。もう体は震えていない。全力で走る。

「貴方も……。あの少年と同じなんですな」

哀しげに話す魔術師を睨みつけながら、和真は勝てるはずもない闘いに身を投じた。

常盤台中学。

学園都市有数のお嬢様学校であり、生徒全員がレベル3以上の超エリート校でもある。もちろん校則は厳しく全ての生徒はもう自分たちの部屋に入っている。そのとある一室で二人の少女が会話をしていた。茶髪を肩まで伸ばした少女と、これまた茶色い髪をツインにした少女である。

「ねえ黒子。あれからあいつに会ったりした？」

「黒瀬和真のことですか？それなら会っています・・・お姉様？まさかよりによってあの殿方と呼ぶのすら忌まわしい奴を……」

「は、はあ！？違うわよ！あんたがあれから浮かない顔してるからちよつと気になっただけ！」

「そうですね……。私は何も問題はありませんわ。もともとあの無気力男とは昔から馬が合いませんの。それより初春の方が……」

「初春さんすごいシヨク受けてたもんね……。元気無いの？」

「元気が無いどころか、毎日一日中衛星監視カメラの映像を覗いていますの……。目的は聞くまでもありませんわね」

「それって職権乱用ってやつじゃ……」

「職ではありませんのでセーフですよ」

「そつという問題かあ？」

そう呆れたように言った美琴だったが、その後の黒子のため息は見逃さなかった。

第八話 嫌な事に限って忘れない

『お兄ちゃん……』

……ごめん。

『お兄ちゃん……』

……本当にごめん。

『死なないでよう……』

……本当に済まなかった。だから――

『こんなので死んじゃだよう……』

……だから――！

『おにいちゃんああん！』

それ以上言わないでくれ……！

「ん……」

和真が目を覚ますと、そこは病室だった。いかにも病院といった感じの、白を基調とした簡素な部屋。

「オレは……何を……？」

倒れる前の記憶が薄れている。それでも覚えているものの中で、とぎれとぎれの記憶をなんとか繋ぎ合わせてみた。

「そうだ……オレは魔術師と戦って……」

それからどうしたか覚えていない。病院（い）にいるからには敗北したに違いないが、何をどう戦ってどうやられたのか和真は全く覚えていない。

体中に残る痛みに耐えながらも、上半身を起こしてみる。すると病室のドアがガラリと開き、どこかカエルに似ている医者が姿を現した。

「ああ、目が覚めたかい？君の担当の医者だ。幸い大きい怪我はないね？すぐに退院できるさ」

「そうですか……」

ふと病室のデジタル時計を見してみる。日にち付きのそれは、和真が半日ほど眠っていたことを表していた。あれからインデックスはどうなったんだろう？当麻は無事なのだろうか？と頭の中に不安が渦巻く。

今すぐ確かめに行こうか、とベッドから降りようとする和真を医師が抑えた。

「体に問題は無いと言った。だがね、倒れてた君を一番最初に見つけて、しかも一晩中看病していた人に礼も言わずに帰るのは――まずいんじゃないかな？」

「…………誰ですか？」

「さっきトイレに行くと言っていたから、もう少しで帰ってくるんじゃないかな？それじゃ、僕は行くよ」

もう一度ベッドに体を倒した和真を見て、医者は満足そうな顔をし病室を出て行った。

「（見つけただけならともかく、一晩中看病・・・？）」

ありえるとしたら小萌先生あたりかな、と和真は予測を立てながらもう一度目を閉じる。その時、病室をノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

あの医者に起きたのを聞いたんだろうかと思いつつ返事をする。そしてスライド式のドアを開けてでてきた人物に、和真は口をポカんと開けた。

「あ…………目が覚めたんですね」

「う、い…………はる？」

お久しぶりです、と少女は眩しい笑顔で笑った。

「本当にお久しぶりです……………和真さん」
「……………すまん」

和真はそれしか言うべき言葉が見つからなかった。理由も何も言わず急に音信不通で六ヶ月。和真が逆の立場だったら怒鳴り付けていただろう。もう謝罪以外にすることが見つからない。しかし初春は

「どうして、謝るんですか？和真さんは何も悪いことはしてないんですよ。私はまた和真さんに会えてすごく嬉しいんです」

彼女はそれこそ最高の笑顔で言葉を返す。それが和真の心を癒すと共に痛めているとも知らずに。

「確かに何も言わないでいなくなってしまったのは許せません。私達がどれだけ心配したと思ってるんです？」

言葉が出ない。何も返す言葉がない。

「……………けどもいいんです。こうしてまた、和真さんと会えたん

ですから」

「初春……」

ポタリ、と初春の目から涙が落ちた。それを見て和真は悟る。自分は彼女をこの上なく不安にさせ、かつ大きな悲しみを与えていたことを。

それでも彼女は笑っていた。笑って和真におかえりと言ってくれた。それが一段と和真の心を揺さぶる。しかし――

「……悪い初春。オレはもうそちに帰ることはできない。だから――」

「わかってますよ」

「え？」

初春は優しい目で和真を見る。大切な人を労るような目で。

「和真さんを見た時にわかったんです。和真さんはまだ、私たちにわからない『何か』にとらわれているんだなあ、って。だから……私は待ちます」

「待つ？」

「はい。いつか和真さんが帰って来てくれるのを。いつかのように和真さんが笑ってくれるのを」

「……………」

「待っていますよ」

初春はただそう言うと、最後まで笑顔のまま病室から出ていった。一人になった和真を沈黙が包み、彼はポツリと呟く。

「……………待ってる、か」

初春を悲しませたくない。でも戻ることはできない。初春は待っていると言ってくれた。でも戻ることはかなわない。

「……………ごめんな」

和真は自分の手に落ちた水滴を見、それが涙だと気づく。

なぜ泣いているのか自分でもわからない。つらいのか嬉しいのか、悲しいのか悔しいのか。ただ涙が止まらない。

帰りたい。

自分がそう思っていることだけが理解できた。

第九話 話の流れはちゃんと考えよう

「とうま、大丈夫かな……………」

場所はとあるアパートの一室。煙草や缶ビールの空が散乱する中、一人の少女が不安そうな表情を浮かべていた。少女の目線の先には一人の青年。少女が知らない間に魔術師に襲われ、酷い傷を負っている。その寝顔を見ながらインデックスは自責の念に駆られていた。自分のせいでとうまは傷ついた。それなのに自分はその時、あるうことかとうまを心配するどころか魔術師を撒いてはしゃいでいたのだ。私は何をしてたんだろう……………。

少女の頭の中をもう何十回も同じ事が往復する。そうして泥沼のように抜け出せない思考にはまっていると、不意にアパートのチャイムが鳴った。

誰だろう、また魔術師だったりしたら？とインデックスの脳裏に不安がよぎる。もしそうなら――

少女は覚悟を決めてドアを開けた。

するとそこには、

「よう、当麻はまだシスターさんにつきっきり看病っていう恩恵を受けてんのか？」

「あ…………昨日助けてくれた人？」

おお、と彼は笑った。数時間前に流した涙など全く感じさせない笑顔で。

「そつえば、名前を聞いてなかったね」

インデックスは寝ている当麻の横に座りながら言った。入ってきた青年も近くに腰を下ろす。

「ああ、オレの名前ね？黒瀬和真。呼び方は好きにしてい「ねえか
ずま、」……………」

好きに呼んでいいと言ったものの、何だか和真は釈然としない。
まあそれはともあれインデックスの呼び掛けに答える。

「何だ？」

「かずまも、とうまみたいに魔術師に襲われたりしたの？」

「ん？ああ、まあちよつとな。いや、オレは別に軽傷で済んでるんだし、別に気にする必要は——」

「——めだよ」

「ん？」

「かずまは普通の人なんだから、あんまり私の事情に首を突っ込んじゃだめだよ。そんなことで怪我なんかしても……………」

「……………」

何を言ってるんだ？と和真は思った。大変なのはどうか考えてもお前の方だろう。それなのになんでこの子は——そんなに真剣にオレを心配できるんだ？

和真はインデックスのような人に会うのは初めてだった。他人の為にいつも奔走している当麻ならいざ知らず、こんな重荷を背負っている子がなぜ自分のようなどうしようもない人間を心配している？

それに——

なぜそんな優しく清廉な少女が、こんな事情を抱えなければならぬかい？

和真は自分の中で発生している初めての感情を表に出さないように、インデックスの顔を見続ける。

「とうまはもう、私の抱えているモノの危なさを全部理解した上で聞いてくれたけど、かずまは——」

「……バカかお前は」

びり、と和真はインデックスの額にデコピンをする。

「痛っ！何するのさ！」

「他人を助けるのに理由なんていらねえんだよ。お前は黙ってオレや当麻に助けられてりゃいいんだ。そんなくだらない台詞、二度と言っな」

何を言ってるんだオレは、と和真は自分の発言少し呆れた。この少

女を助けるか迷ってたのはどこの誰だ？この子の抱えているモノの強さを恐れたのはどこのどいつだ？紛れもない、オレじゃないか。和真は思う。オレは本当に偽善者だな、と。彼女のような根っからの善人ではない。飾り付けの善意だ。

でも、とインデックスは反論した。

「かずまは私が抱えているモノを知らないから——」

「バカ。お前らの会話外までだだ漏れなんだよ。お陰でとある少女の秘密を偶然知っちゃったじゃねえか。どうしてくれんだ？全く」

何を——とインデックスの思考が一度止まる。そして答えにたどり着いた。

「聞いてたの……？全部……」

「あ、でも一つだけ勘違いすんなよ。聞いたのはオレの意志だから巻き込んでしまった、とか余計なこと考えてたらもう一発デコピンだぞ？」

「な……んで？」

「なんで………ね」

正直に言えば安っぽい正義感か、と和真は自己解析する。当麻がいなかったら自分は恐らく踏み出せなかっただろう。でもそんな不安定な気持ちで助けた、なんて言ったら……

「（こいつは納得できないだろうな）」

この少女の本質がそうなのだ。自分が救われようのない運命を背負っているというのに、絶対に他人を傷つけまいとするその精神。和真にはそれがとても眩しく見えた。だからこそ、と和真は感じる。

この少女を助きたい。

「さっきも言っただろ？他人を助けるのに理由なんて必要無いってよ。当麻も多分そんな感じだ。だから……………一緒に頑張ろう」

「……………」

二人の間に沈黙が降りる。和真は自分の白々しい台詞にもう心の中では辟易していた。もう嘘でもキレイ事でも何でもいい。ただこの子を安心させることだけを考えている。

「ねえ、かずま……………」

「何だ？」

「……………そういえば和真が最初に私に会った時ってどういう状況だったっけ？」

「えつと確か……………当麻の右手がお前の修道服を破壊して——え？何でいきなりそんなに歯を剥くんだ？っていうか話の流れ的に絶対おかしいだろ！今はシリアスかつ感動的な——って痛い痛い痛い！当麻が頭を押さえてもがきまわってた理由がわかった！」

「それなのに普通に話しかけてくるのはちょっとおかしいかも！」

「おかしいのはお前の顎の力——ってまさかの痛み三倍増！？あーもうこの際言わせてもらおう！」

和真は天に向かって吼える。

「不幸だああーっ！」

第十話 嫌な予感がよく当たる

「いってー……………あれ^{かまれて}からもう二日たつのにまだ頭の痛みひかねーぞこんちくしょー……………」

和真はまたも子萌先生のアパートへの道を歩いていた。目的は変わらず当麻の見舞いである。

今日ははっきり言って和真は幸運な日だった。幸運とは言っても、何も良いことがおこったわけではない。悪いことが少なかったのだ。久し振りにエレベーターを使ったけど何も起こらなかったし（いつもは階と階の間で止まって故障したり、ボタンを押す時に誤って突き指をしたりする）、道行く不良に絡まれて能力を使うこともなかったし、（いつもはレベル3や時には4に五人くらいで囲まれる）今日行ったコンビニにはいつもの缶コーヒーがきちんとあった。

小さな幸せ……………というより普通のことなのに幸運を感じる和真であったが、もちろん全く不幸がなかったわけではない。

御坂美琴に絡まれ、適当に無視したところ激怒されラウンド1開始
(pm01:34)

路地裏に逃げたところ美琴がたくさんいた幻覚を見る。 (pm01:59)

気分が悪くなり表に出たところ美琴に遭遇しまさかのラウンド2。
(pm02:08)

美琴の電撃が清掃口ホに直撃し、警報が鳴って追いかけ回される。

(pm02:19)

ようやく寮に帰り、入り口で土御門舞夏に遭遇。しばし談笑していたところ、兄貴の怒りの跳び蹴りをくらい悶絶。

(pm03:

04)

「……………そんないい日でもなくなね？」

と、まあそんな感じである。それでも彼は日々を精一杯生きて――

「おい無視すんなよコラ。明らかに量も質も不幸の方が上じゃねえか。これで『幸運な日』はねーだろ。『不運な日』が来たら死にそうな勢いじゃねえか」

とまあ独り言を言ってるうちに子萌先生のアパートに着く。和真はすぐにチャイムを鳴らし――

「あくまでも無視か」

はーい、といたいけな少女の声が聞こえる。そしてガチャリ、とドアが開いた。

「よう。当麻はまだ生きてるのか？」

「うん、生きて――ってとうまが生死の境をさ迷ってるみたいな言い方はやめて欲しい！」

「え？死んだ？」

「生きてるっ！何で境じゃないなら死んだ方になるのか説明して欲しいかも……………」

はあ、と溜め息をつきながらインデックスはちよこんと当麻の横に座る。和真も当麻の顔を見て、これは大丈夫そうだと安堵の表情を見せた。

二人とも当麻の顔を見つめ会話が無くなる。

和真は知らない。

今日が少女が記憶を保ってられるリミットだということを。

インデックスは知らない。

こうしている間にも、彼女に危機が迫っていることを。

二人は知らない。

今日という日でどんな決着がつくかを。

ただ、その時を待つのみ。

「……………ん……………」

「当麻？」

ピクリと当麻の体が動き、ゆっくりと目が開いた。和真は読んでいた脳についての本から目を離し、当麻に呼び掛けてみる。

「……………和真……………か。インデックスは……………？」

「安心しろ、あの子はまだ無事だ。今はなんか疲れたみたいでそっちで寝てるが」

「そうか……………今何時だ？」

「何時って言われれば十時だが……………三日後のな」

「三日！？何でそんなに寝てたんだ俺！？」

「三日……………な」

当麻は三日という数字に驚きの表情を見せるが、和真は逆に何かを考え込むような顔をしている。その疑問は当麻にもすぐ理解できた。

「和真……………お前もあの話聞いたのか？」

「ああ、だからこそ思う。なぜあいつらはインデックスを『回収』しにこない？三日もあつたんだ。当麻という厄介な護衛がいない時間だ。なのになぜ？」

ますます深い疑問にぶち当たる和真だったが、当麻は何か別のことに気をとられていた。

三日……三日……何か深い意味があった気がする。ふと二日前の魔術師の言葉が思い出された。

「制限時間！」
リミット

「？ 何がだ？」

「今日が限界なんだ……インデックスが記憶を保っていられる……」
「な……っ！」

「おい！インデックスに何かあったりしてねえよな！？」

「大丈夫だ。今日もオレのことは覚えていたし、特に異常は無い。だけど今日ってことは……っ」

嫌な予感が和真の身体中に広がった時、ドアの方から聞こえてきたのはコンコン、とノックの音。子萌先生では届かないような高い位置から響く音。複数人の気配。

ツルリと和真の頬を冷たい汗が伝った。

「……………くそっ たれが……………！」

第十一話 怒り方は人それぞれ

「ふうん。片方は回復したみたいだけど、そっちの方は簡単には逃げ出せなさそうだね」

ステイル・マグヌスは言った。硬直する当麻と、既に戦闘体勢に入っている和真を楽しそうに見て。それで当麻と和真は彼らの狙いをすぐに理解した。憎らしげに和真が口を開く。

「成る程……この子を逃がさない為の……か」

「察しがいいね。神裂から聞いたらしいけど、この子は僕たちの元同僚だ。性格は熟知してる。君たちみたいな足枷が二人もいれば、逃げようなんて考えもしないだろう。いやいや、本当に任務御苦労様」

皮肉っぽく、いかにも楽しんでいるように彼は言う。しかしもう和真は彼らの本心を知っているのだ。彼らがインデックスを守るために行動していることも、そのために彼女の敵になり続けていることも。

「無理すんなよ炎の魔術師。そんなに可哀想な表情なんてしてたら、こっちが沈んだ気分になっちまうわ」

「何だと？」

「悲劇のヒーロー気取りやがって……いや、お前らはもう戦うことを止めた負け犬だ。見ていて哀れで仕方がねえよ」

「……黙れ！」

和真の嘲りにステイルは怒りの声を上げるが、どちらかと言えば怒っているのは和真の方だ、と当麻は感じた。拳をぎゅっと握りしめ、

普段からは想像もできない表情で魔術師たちを嘲る和真の顔は怒りでゆがんでいる。

「帰れ。お前らの顔なんて見たくねえよ。どの面下げてこの子の前に立てるんだ？それでこの子が救われるような事を、お前らはしてんのかよ！格好つけてんじやねえぞ馬鹿どもが！」

「神裂にやられて無様に敗北した君がよく言うじゃないか、え？結局君は——」

「——帰って」

荒々しい雰囲気が漂う部屋の中に、凜とした声が響いた。むくりと体を起こしたインデックスは、和真と当麻の前に立ち塞がって両手を広げる。後ろの二人を庇うように。必死な顔で、恐怖も隠さず。

「おねがいだから……私ならどこへでも行くから、なんでもするから、本当に、本当にお願いだから……とうまとかずまを傷つけないで」

それは、その言葉は深く魔術師たちの心を刺しただろう。白熱したナイフのように、鋭く光る氷のように。言葉と言うものは、時に何よりも深く突き刺さる。それでも——

魔術師たちはまたスイッチを己に入れる。『仲間』である彼女の為に、彼女を悲しませないように、『仲間』であることすら棄てて。

駄目だ、と和真は思った。彼らはもう心が折れている。もう戦えない。残酷な運命に従い、地面をはいくつばっているだけの存在。救いようがない。

「リミットまで、残り十二時間と三八分」

感情を押し殺した声でステイルは言う。それが己の為すべきことでもいうように。これしか道はないとでも言うように。

「その時までには逃げ出すことがないか、足枷の効果を見てみたかったのさ。まあご立派に二つも足枷を着けてたんじゃ、たとえ何をしようと思われとは思わないけどね」

それ以上は何も言わずに、魔術師たちは古いアパートの一室を出ていった。壮絶な顔をした和真と、絶望に近い顔をしている当麻。そして涙と安堵で顔をくしゃくしゃにしているインデックスを残して。

当麻も和真も、彼女の顔を直視できなかった。

夜。

当麻は受話器を置いた。相手は魔術師、神裂火織で、内容は降伏勧告のその電話を。

「くそっ！」

当麻は畳の上に思いつきり拳を叩きつける。目の前の、全く突破口の無い問題にぶち当たって。もう彼には自分一人でできることは何もない。その無力さに腹を立てて。

一方和真も、スヤスヤと眠るインデックスの隣に座り込み、天井を見上げている。手の側にはさっきまで読んでいた脳に関する本が置かれてあるが、置き方からしてもう使うつもりはないようだ。しかし彼は諦めたわけではない。もう魔術師の説明の矛盾には気づいている。

でも、彼には心の準備が必要だった。彼は上条当麻のような善人ではない。他人を助ける時も、それは見捨てる罪悪感から逃れるためだったり、何か打算を内に秘めていたりすることもある。しかし今回は違う、と和真は思った。今回はただこの子を助けたい。

「……………よし、やるぞ当麻」

「……………何を？」

「不幸少女救出作戦、だ」

は？と当麻は良くわからないような声を出す。これ以上何をするっていうんだ？もう誰かに縋るしか手は残されてないんじゃない？と思う当麻に、まず和真は咳払いから説明を始めた。

「落ち着いて良く聞け。完全記憶能力をたとえ持っていたとしても脳がパンクすることは絶対にありえない。それならこの子は魔道書云々が無くても六年も生きられない計算になるしな」

「そうか……………一年で十五%……………」

「そう。そしてコレが先生の本から見つけたモノなんだが、」

落ちていた本をペラリとめくる。

「脳の記憶っていうのは一つじゃないらしい。言葉や知識を司る」

意味記憶』。十万三千冊の魔道書はここに入ってるんだろう。他には運動の慣れとかを司る『手続記憶』。そして最後が――」

今現在インデックスの中から消去されようとしている記憶。彼女の周りの人間にとってはとてもとても大切な、絶対に失って欲しくない、

「思い出を司る『エピソード記憶』だ。いくらこの子の『意味記憶』が魔道書でいっぱいでも、『エピソード記憶』にまで影響を及ぼすことなんてあり得ない。でも――」

隣で眠るインデックスの息は荒く、顔はかなり紅潮している。

「『何か』がこの子を縛っていることには間違いないだろう。……まったく、あいつらは脳に無知にも程がある。だから『馬鹿ども』と呼んだんだがな」

「じゃあ、こいつを縛ってる『何か』ってやつを見つければ……」
「見つけてお前の右手で破壊すれば完全勝利って感じが。ま、それはお前の仕事だ。オレじゃ見つけてもどうしようもないし、それより大事な用件がある」

左腕に着けている腕時計を覗き込むと、針はもう重なりかけていた。ガリリ、いつもの力よりはさらに強く、和真は唇を噛む。それはいつもの行為。恐怖に打ち勝つため、自らを戦いに奮い立たせるため。

玄関まで歩き、靴を履いてドアを空ける。近くにいた二人の魔術師の姿を確認する。ニヤリ、と笑う。同時に背中にツーンと冷や汗が流れた。

準備は全て整う。

「かかって来い魔術師ども。素敵で最高の結末を迎えるまで、な」
それまでのお膳立てだ、と和真は笑った。

第十二話 二対一なら気を抜くな

「かかって来い。当麻がヒーローになるまでの——」

「時間稼ぎね……。君はこの状況をよく理解していないみたいだ」

煙草の煙を揺らしながら、ステイルは嘲るように懷からカードを出す。紙ではなく、しっかりとルーンが刻まれているカードだ。恐らく前回の敗戦から学んで強化してきたらしく、確かにそれを何万枚と貼られれば磁力で剥がすには難儀するだろう。そしてステイル呪文を詠唱しようとした瞬間、

「——ぬっ!？」

ステイルは磁石に引きつくように地面に叩きつけられた。恐らくステイルとその周りの地面に違う極の磁場をつくったのだろう。

「その程度の磁力で張り付いてるようじゃお前のその図体は飾りみたいだな。手が動かせなきゃルーンのカードも出せないだろう？」

「く………そっ………!」

「さて、一人動きを止めたところで——」

神裂はチャキ、と刀を鳴らす。体にかかる磁力などともせず。

「こっちはやっぱり一筋縄じゃないみたいだな………、こんなに磁力作ってんのにピクリともしないなんて………アンタ人間か？」
「神裂は………」

黙って戦闘態勢に入る神裂に変わって、口しか動かせないステイルが喋る。

「世界に二十人しかいない聖人だ……それに対抗することがどういふことかわかっているのか……」

「……知るかそんなもん」

もう勝つか負けるかなんて関係なかった。和真は初めて心から人を助けようと思ったのだ。その行動には罪悪感から逃れる為の薄い正義感も、内に秘めた打算もない。後ろに見える、古いアパートの一室で二人で話した時から――

「オレはアイツを助けるって決めたんだよ！絶対だ！」

救いたいと思えた。そう思わせてくれた。その少女を――

「助ける！」

その声と同時に和真はすかさず動いた。もともと自分の力があの聖人とやらに敵うとは思っていない。ならば先手必勝だ。

道端に落ちている石に目をつけ、右足で蹴る。ただの蹴りではない。インパクトの瞬間に靴と同じ磁場を作り、反発する力を利用してかなりのスピードで弾き飛ばすのだ。しかし神裂は無言でそれを刀を使い払う。和真は次々と石を放つが、神裂は払いのけながらも一気に距離を詰めて懐に入ってきた。人間には反応できない速さの神裂の蹴りが、和真の腹に突き刺さる。

「がっ………は………」

「七閃」

さらに冷酷にも放たれたその言葉に従って、七つの斬撃が和真を吹き飛ばした。和真はアスファルトに打ち付けられ、肺に空気が入らなくなる。神裂は倒れている和真に向かってゆっくりと歩いてきた。しかし和真は立ち上がれない。

「……………」

神裂は無言で刀を抜き、大きく振りかぶる。そして地面に倒れている和真の右肩に向け、刀を振り下ろしたその時、

「!?!」

黒い盾が神裂の刀をはじいた。

「あー……、やっぱりここじゃあんまり無いみたいだ……」

黒い盾が形を変えて、ゆっくりと立つ和真を取り囲む。よく見ると、一つ一つが砂のような小さい粒だ。神裂は少し間をとり、八・〇の視力で黒い盾を凝視する。

「砂鉄、ですか。かなりの力で操られてますね」

「そうだ。そして盾以外にこんな使い方もある」

砂鉄はだんだんと細い棒のような刀を形どる。高速で振動させたチエンソーのような刃。そこらへんの物なら切り刻むのに苦労はしないだろう。神裂を少し本気にさせるには十分だった。

一瞬。たった一瞬で約十メートルの距離を詰め、七天七刀を和真に振り下ろす。和真はそれを黒い刃で受け止めることに成功したが、それは反応した、というより反射に近い現象だ。鏑迫り合いのよう

な形になるが、その状況に二人とも驚きの表情を見せた。

「私の七天七刀を受け止めますか……厄介な力です」

「いやいや、驚いたのはこっちだよ神裂さん。なんで……」

ぐぐつ、と和真の方に七天七刀が迫る。

「（何でも切り刻めるこの刀が……）」

和真の腕や足、その他全ての筋肉の筋一本一本が悲鳴をあげている。
一瞬も力を抜けない。

「んなに押されてるんだよっ！」

「——ッ!？」

その声をかけ声代わりに、砂鉄の刀が一瞬だけ砂に戻る。戦うべき
相手を無くした七天七刀は、そのまま深くアスファルトに突き刺さ
った。そして砂鉄が再び刀の形をとる。

「強すぎる刀つてのも考えようだなっ！」

目の前には無防備な神裂。こちらは何でも切り刻める刀を持った和
真。両者の勝敗は決したように見えた。

しかし神は和真には微笑まない。刀を振ろうとした和真の背中に、
炎の塊が襲いかかる。

「——ぐアッ!？」

倒れながら後ろを見た和真の視界には、カードを何とか取り出しこちらを攻撃したのである。炎の魔術師の姿があった。

砂鉄が刀としての形を失い砂に戻る。その瞬間を神裂は見逃さない。神裂の全体重が乗った蹴りが、和真をいとも簡単にブロック塀に叩きつけた。

かつて食らったことのない衝撃に視界がぐるぐると周り、頭が空っぽになる。がくん、と和真は項垂れた。

「（……………痛ッ…………）」

もう勝負は決まったようなものだ。和真の体にはもう少しも力が入らないし、神裂に決定的な攻撃なんて一発も当てていない。和真はもう神の裁きを受ける罪人のような気分だった。

「（……………これは本当に死ぬかも知れないな）」

ゆつくりと歩いて来る神裂を見て、ぼんやりと思う。和真は目を閉じた。

その時。

瞼の裏に映ったのはとある病院の一室。頭に花飾りをつけた少女が、笑いながら涙を流していた。少女は口を開いて何かを喋っている。音は聞こえなかったが、口の形で全てを思い出した。

『待っていますよ』

「——ね……るか」

「？　何か言いましたか」

神裂は和真の目の前に立ち、和真の小さな呟きを聞き取ろうとする。和真の肺に空気が入った。

「死ねるかア！」

磁力で神裂の刀を吹き飛ばすのと、地面との反発で高くジャンプするのが同時だった。少し遅れて砂鉄がもう一度刀の形をとり、和真の手に収まる。そして丸腰の神裂に、和真は齒をくいしばりながら黒い刃を振り下ろした。しかし――

あくまでも神は和真には微笑まない。

もう限界を越えていた和真の体は、刀を振り下ろすことなく空中で崩れ落ちた。

「ち、く………しょ………」

ドシン、と和真の体が堅い地面に落ちる。和真はもう目を閉じていた。自分の命が絶ちきられる瞬間に怯えながら、それでも自我を保とうと和真は目を瞑る。走馬燈なんてものはない。ただ静かな時間が流れて……

攻撃が来ない。

「……………？」

顔だけを何とか動かし、神裂がいたと記憶している方向を向く。し

かしそこに神裂はいない。とどめを刺さずにインデックスを回収するつもりか、と思った和真はゆっくりと逆の方を見る。そこには不思議な光景があった。

「な……んだ？」

薄れゆく意識の中、和真はアパートの部屋に白い光が満ちるのを見た気がしたが、そこで和真の思考は途絶えた。

第十二話 二対一なら気を抜くな（後書き）

戦闘描写は難しい……

第十三話

目を覚ましたのはまたもや病院の一室だった。

「……………何がどうなった」

まず口から出てきたのはそれだった。あの少女の記憶は守られたのだろうか。当麻はどうしたのだろうか。何か三日前も同じようなシチュエーションだったような……とくだらないことを思い、脇腹に残る痛みに耐えながらも和真は体を起こす。するとベッドの上に置いてあった手紙に気がついた。差出人はステイル・マグヌス、炎の魔術師である。まだ血がこびりついている両手で、ステイルからの手紙を開く。

『挨拶は無駄なので省かせてもらおうよ。色々と言ってやりたいことはあるが、それはあっちの方にまためておくとして——』

あっちの方とは当麻の方が、と和真は納得して続きを読む。不思議と真実を知る恐怖はなかった。それもそうだろう。インデックスの『回収』に成功したのなら書き置きなど残す意味がない。

『——結果としてあの子の記憶は守られた。あの子に着いていた首輪を上条当麻の右手が破壊し、もう記憶を消す必要は無くなった』

「……………そうか」

和真はホッと一安堵して肩の力を抜く。そして力が抜けたせいか、その顔は優しく見えた。いつも無愛想な彼からしたら珍しい顔だろう。それほどそのニュースは和真を歓喜させた。そしてもう若干ど

うでも良くなった続きを読む。

『真実に気づいた君には一応感謝しておこう。だけど安心するにはまだ早い。イギリス清教が下した判断はまだ様子見だ。次に君に会う時は恐らくあの子を奪還する時だろうから、それまでせいぜいあの子をしつかり守ることだ。もしもあの子に危害が及ぶようなことがあったら、僕は君を髪の毛一本残さず焼き尽くすからそのつもりで』

読み終わると同時に、手紙はボン！と音を立てて燃えた。両手を炎が覆い、かなりの熱が和真に伝わった。だがもうそれはどうでもよかった。和真はただ少女の――

「いや、どうでも良くねえから」

――記憶が保たれたことを喜んで、

「どうでも良くねえって言うてんだろ！普通に熱いわ！あんのクソ魔術師ぶっ殺すからなあああ！」

和真の魂の叫びが病院内に響き渡った。

その後看護師さんに注意された。

両手に火傷を負ってから十分後、和真は病院のとある一室の前に来ていた。ここはツンツン頭の友人の病室らしい。ノックをして病室に入ろうとすると、インデックスが入れ違いに部屋から出てきた。和真の顔を見上げて笑顔をみせるインデックス。それを見た和真は記憶が残っていることを確認して安心する。

「ようインデックス。どうした？ちょっと泣いてるみたいだが」

「な……泣いてないもん！だってとうまったら私のこと忘れてるふりしてたんだよ？酷いと思わない！？」

「忘れてるふり？」

「うん。だからかずまも気をつけた方がいいかも。……あとかずま、」

「何だ？」

「ありがとう」

そう笑顔で言っただけで彼女は病室の廊下をいそいそと歩いていった。和真は満足だった。その笑顔。全てが取り払われたその笑顔を見るために当麻や魔術師、そして自分は頑張れたのだ。少し嬉しく、また恥ずかしくなりながらも和真は病室のドアをノックする。早くあいつに礼を言いたい。そう思いながら和真は病室に入った。

その行為が彼を地獄に叩き落とすとも知らずに。

「あー……………最悪」

和真は病室のベッドで項垂れていた。当麻と話をしている途中に医者が来ていきなり病室に戻されたのだ。打撲に加えて肋骨が折れているらしい。だがそんなことはどうでも良かった。

「あの野郎覚えてるふりなんかしやがって……」

上条当麻の記憶が失われていることなどすぐにわかった。まず言動がおかしかったし、『いつもみたいにカズって呼ばないのか?』と聞いたら、『悪い、カズ』ときたものだ。冗談だ、と打ち消した時の当麻の顔色はすこかった。

気絶していた和真にはわからないが、医者の話によると脳に物理的なダメージがあり、もう記憶が戻ることはないらしい。それでも自分たちを傷つけないよう、当麻は覚えているふりをしたのだろうか。あり得ない、と和真は思った。

もうインデックスや和真の記憶は残っていないのだ。知らない人間の為に嘘を突き通す人間がどこにいる?それとも、例えば彼の中にインデックスを傷つけない、とでも思う部分があったんだろう。

か。もしそれなら、もしそんなことがありうるなら、和真も知っているふりをした理由になる。彼女にバレたくないのだろう。

あり得ない、と和真の九十九%がそう思った。

しかし残された1%でこう思う。

「当麻ならあり得ないかもな……。心に残ってる、なんて……」

思ったより大きく声に出たその呟きは、空気の震動となって病室内で消えていった。

「……心に、ね」

カエル顔の医者は通りかかった病室から聞こえた呟きに笑みを漏らした。

全く科学的でも、現実的でもない。しかし医者はその言葉をもう違う青年から二回も聞いたのだ。

もしかしたらあり得るのかもね、と感じながら、医者は自らの戦場へとまた歩いていった。これ以上の『敗北』を重ねない為にも。

第十三話（後書き）

これにて原作一巻終了です。どうだったでしょうか？

感想、評価などいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0692ba/>

とある科学の磁気単極《モノポール》

2012年1月12日21時49分発行